

2012 年 2 月 13 日
茨城大学農学部最終講義 前口上

地域と響き合う大学を求めて ——茨城大学での 10 年を振り返って——

中島 紀一

2001 年 5 月に鯉淵学園から茨城大学に転勤して 10 年 9 ヶ月が経ちました。この間、かなり自由に充実し日々を過ごすことができました。これは学内、学外のみなさんのご理解があつてのことでした。まず何よりもそのことへの感謝を申し上げたいと思います。

私は一つことにだけに集中できない性格なので、茨城大学の 10 年間にずいぶん多方面のことに係わってきました。しかし、なかでも地元阿見町と茨城大学との地域連携はとても魅力的な分野であり、私なりに大切に位置付けて取り組んできました。

2001 年の 11 月の頃だったと思います。高原先生が私の研究室においでになり、先生が主宰される地域連携シンポジウム「地域の市民、企業および大学が環境保全型社会の推進」（2002 年 1 月 26 日こぶし会館で開催）にお誘いいただきました。これが私が阿見町でこの課題に参加するようになった始まりでした。私はこの会で地域の暮らしと里山の意味についてお話ししたように記憶しています。

阿見町についてほとんど何も知らなかった私ですが、この会で高原先生らの「のらっくす農園」の取り組み、佐藤征雄さんの「阿見・里山ワンダーランド・わっかくる」の取り組みを知ることができました。古くからの友人だった飯野良治さん（上長の専業農家）と 10 年ぶりに再会したのもこの会でした。

このシンポジウムのあと、佐藤さんのワンダーランドの会の総会でも、稲敷台地の里山論についてお話しする機会をいただきました。

実はその 10 年ほど前、阿見町でもゴルフ場開発の嵐が吹き荒れていた頃、地元の中堅農家の方々のリーダーシップで「阿見町の自然を愛する会」が発足し、その設立総会に招かれてお話しをしたことがありました。当時私は筑波大学の助手をしており、また、居住地の八郷町で「八郷町環境を守る町民連絡会」の代表として、産廃不法の投棄反対やゴルフ場開発反対などの運動に係わっていました。阿見町でお話しさせていただいたのは、八郷町での運動が農家主導であつたからでした。佐藤さんは、このときも私の話を聞いていただいていたとので、ご縁とはありがたいことです。

そうこうしているうちに、阿見町には自然保全と農業をつなげようとする市

民ボランティア組織が、たとえば「神田池を保全する会」などいくつも活動していることが分かってきました。私自身も、飯野さんからの誘いで 2003 年秋から、上長地区の耕作放棄地のうら谷津の再生活動を始めていました。

大学の側でも、法人化が既定の方向となり、地方大学の重要な仕事として地域連携が位置付けられるようになり、阿見町と茨城大学との地域連携協定の締結へと取り組みは進んでいきました。大学教育においても 2005 年～2008 年の 3 カ年、文科省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」（現代 GP）に「自然共生型地域づくりの教育プログラム——都市周辺の荒廃農林地再生に向けた農学教育の新展開」のテーマで採択されその取り組みが開始されました（推進事務局は小松崎先生）。

市民団体の側では、大学からの呼びかけもあって相互交流の場が度々もたれるようになりました。そして、地元の農業、地元の自然、そして地域づくりについて学び合い、話し合う「地域づくり勉強会」が何回も開催され、そこでの話し合いを踏まえて「自然」「農業」「暮らし」の 3 つを共通のテーマとして「あみ自然再生ネットワーク」（代表は佐藤征雄さん）が 2006 年 1 月に発足しました。

さらに「あみ自然再生ネットワーク」の重要な活動として 2006 年 11 月に「あみ大好き青空市」の第 1 回が約 1500 人の来客を得て開催されました。そこでは「手作り」「産消交流」「自然に優しい農」の 3 つが共通テーマに設定されました。この青空市は好評を得て昨年 11 月に第 6 回が開催されています。

また、阿見町と茨城大学と自然再生ネットワークの 3 者の連携で、地産地消の学校給食推進も取り組まれ（推進責任者は安江先生）、阿見町の学校給食は茨城県産農産物の利用率では県内トップとなっています。

阿見町行政の取り組みとしては、2009 年に「環境保全基本条例」が制定され、2010 年に環境教育の推進を第一に掲げた「阿見町環境保全基本計画」が策定され、計画の初年度の 2011 年度からは「阿見町環境保全基本調査」が自然環境に詳しい市民ボランティアたちによって取り組まれています。

私は 1965 年に、いまは廃学となってしまった東京教育大学農学部に入學し、総合農学を専攻し、菱沼達也先生を師と仰ぎ、千葉県成田市の南羽鳥という小さなむらをフィールドとした「村と学校を結ぶ」活動から研究生生活を始めました。そして定年を迎えるいま、地元阿見町と大学との地域連携をテーマに最終講義ができることに大きな喜びを感じています。

定年後、私自身は阿見町民ではありませんが、あとしばらくは、この間いただいた地元の皆さんとのご縁を大切に、阿見町での地域活動が続けたいと思っています。なにとぞよろしくお願いします。

今日は最終講義で、思い出話だけでは申し訳がたたないので、私の子どもの頃からのフィールドワークの主な舞台となった関東ロームの台地と谷津田について少し講義風にお話ししたいと思います。